

「……ふあーあ。朝か…。」

五人部屋の学生寮の二段ベットの上から朝日の暖かさと眩しさを感じ、僕こと天城深夜あまぎしんや17

歳は目を覚ました。少し寝すぎたかと思いつ計を見るとまだ朝の六時半ぐらいだった。僕はそんなに早起きなほうではないのだがまあ目が覚めてしまつたのなら仕方ないと他のルームメイトを尻目にひとまず朝の散歩と洒落込むことにした。

「にしても食堂が開くまで後三十分かー。個人的には今すぐ飯食いたい気分なんだけどな…。」
などと言つても食堂は開かないでこうして外に出ようとしているわけなんだがな。それにしてもいい朝だ。早起きは三文の得というのはあながち嘘じやなさそうだ。この施設は中々縁も豊富でというか周りをぐるっと山で囲んでる感じで建てられてるから豊富もへつたくれもないんだけどね。

さてさて、何故僕が学生寮にいるとか、ここはどこなんだとか、一体話のあらすじは何なんだコノヤローとか言われる頃だと思うのでこの天城深夜が簡単に説明いたします！

時は2×××年6月。人類は新たな時代に入った。100年前に生体実験の結果新たに人類、新人類が誕生した。新人類は運動神経、知能に突出しており、普通の人間に比べ数倍の能力を誇る。

だが、これが引き金となり今世界は戦争やらテロやらで大賑わいのお祭り騒ぎで、ようするに荒れに荒れ放題というわけだ。しかも半世紀前には人類と新人類との間に大きな溝が

できてしまい今では人類の手により新人類の数もかなり減ってしまった。ちなみに新人類と人類では人口の差が100倍近くあり、人類側が数の差で圧殺という方法もあつたが、もしそんな強引な手段を使っていたらぶん人類のほうも半分は消えていただろう。それほど新人類は優れていた。

だが一人の発明家により人類は更に大きな力を得た。それは『妖精』と呼ばれる人工知能生命体である。こいつらは様々な形（文字通り妖精、人型、機械型などなんでもござれ）をしており、個々に能力を宿している。その能力は基本的に武器に付与することでその真価を發揮する。例えば火の特性を持った妖精を剣や銃にインストールすれば燃える剣や、炎を纏った銃弾の完成だ。とまあ大雑把ではあるがそんな感じだ。

そして僕がいるこの学校。いや、軍事学校はその妖精の扱いを研究、実用化している特殊な学校だ。ここにいる生徒は基本わけありだつたりするのだが、奇特にも望んで入学してくれる奴もいる。ちなみに僕は前者であるが理由は言わない。しかもこの学校、人体実験もかなり行つていて毎年何百人も失敗で殺されたり、また精神崩壊などでいなくなる生徒もいるという最悪な環境だ。だが今はそういう時代つてことで僕は割り切つている。実際普通に暮らしていく中でその町でテロが起きない可能性は決して低くはない。だからどこにいても同じだし、ここにいれば一応生きいく力はつくからね。まあ僕がここにいる理由はまた別だけださ。

といつても表向きは学校なのでそういういた設備もきちんとしている。一応初等～高等部まであり1学年200～300人程度で一貫して普通科である。先程も述べたが全寮制で、男女に部屋が分けられており、一部屋で1～6人ぐらいで部屋は割り当てられている。ちなみに部屋割には格差があり、一人部屋を獲得するにはかなり優秀な成績の人間だけが許されるのだ。まあ僕は平凡に4人部屋だけださ…。

敷地内では生活に必要な設備は一通り揃っているが、食事やそれ以外のものはこの施設の中限定の通貨を使用しなければならない。通貨はこの学校のもので、毎月決まった額を受け取るが、敷地内の施設でのアルバイトは自由でそれによって通貨の変動がある。

通貨の額は生徒それぞれに割り当てられた役職によつて変わる。学校らしく名前には委員会がつく。生徒会やら風紀委員に図書委員。はたまた掃除委員なんてのもいる。これに在籍しないと通貨が貰えない、また頑張らないと通貨が貰えないため皆真面目に取り組んでいる。

娯楽は多少あるがメディア系はかなり制限されており、学生はテレビ・ラジオ・インターネットの使用を禁止されており一部の新聞だけが施設の図書館に置いてあるぐらいだ。おまけに電話も禁止で携帯はあるのだがもはや妖精のゲージみたいになつていてる始末だ。どうやら外部に情報が漏れることを恐れての配慮らしい。これだけ聞くと学校というよりはほとんど監獄だ。アルカトラズ刑務所かよ全く…。

だがこんな収容所みたいな学校でも一応部活動はある。もちろん外部との接触を禁止しているので甲子園やら花園は望めないが、結構構類は豊富で、中にはバクテリア研究部などと訳のわからないものまである。彼ら曰く『バクテリアこそ世界最強だー!』などと日夜言っているらしい。なんのこつちや?

とまあこんなのに他にもたくさんあり、細かいのまでいれたらとても両手じゃ足りないくらいだ。ある意味この学校唯一の娯楽なのかもしない。

それとこの学校には新人類の学生もいる。前述に深い溝がと説いたが、一応両者の間で和平なるものが交わされ体面上は仲直りしている。だが、やはり新人類の立場は少し弱く多少の差別なんかもありたりする。特にこの学校（この場合研究所のほうかな?）は彼らを実験動物とみている節があり新人類の学生は頻繁に研究所のほうに連れて行かれる。そこで何を調査しているかは僕みたいな一般生徒は知る由もないのだが…。

服装に関しては自由（私服は施設の購買で買う）だが授業に出るときは一般的な紺色のブレザーの制服がある。変なところだけ常識的な学校ぶるのだから意味が分からぬ。

校舎的なものは洋館仕立てで、初等～高等まで一貫しているせいかかなり広く、たぶん一般的な大学よりも広いと思う。

そして何よりこの学校では妖精の実践的な使用の調査及び兵器としての活用を一番の目的としており、一人一体は所持している。まあ最近とある事件が起きているからこの統計は

ちょっと怪しいところだけね。まずこの学校に入学すると同時に『携帯』という機械が渡される。これは主に電話をしたりするあの携帯ではなくいわば妖精などの入れ物としての道具だ。ちなみに、前述から出てきている携帯はこれの事だ。これにランダムに妖精が一体入っており、またある日突然携帯に現れたりするのだ。何で突然携帯に現れるのかは謎だが、そもそも妖精自体謎の多い物体なので深いところはわからない。これも多分研究やらそのあたりの実験の一環なのだろうけど実際のところは本当に謎だ。ちなみに施設側も生徒が何の妖精を持っているか、また生徒の妖精がどんな能力なのかは細かい事はわかっていないらしい。何とも適當な話だ。

他にもこの携帯は物も収納でき、重さで言うなら20キロまでなら基本いくらでも収納できる。こここの生徒は主に武器やらを入れて持ち運んでいる。いざというとき武器がないと妖精も使えないしね。

「こんな感じかな?」



僕は一人呟いた。気が付いたらもう7時半を回っていた。折角早起きしたのにこのままで朝食抜きにされてしまう。

「やばい、早くいかないと席埋まっちゃう」

僕は足早に食堂に向かった。



食堂に着くと予想通り混雑し始めていたが席はまだ空いているようだった。僕は食券を買おうとしたが…

「……はっ？」

券売機をみるとほとんど売り切れ、っていうかキムチ丼オノリーなんだけど…

「なんだこれは？どういった嫌がらせだ」

しかしよく見ると僕の後ろには誰も並んでおらず僕一人だけがこの券売機を利用している。どうやら故障らしい。なんたる不幸。

「っていうか気付けよ僕…。はあー、早起きは朝飯の損か…」

などと訳の分からぬことを言う始末。それほど僕のショックはデカかった。

「今から並びなおしてたら席埋まりそうだし…。仕方ない今日の朝食はキムチ三昧といふかな」

そう言つて僕はあきらめてキムチ丼の食券（640円也）を購入し食堂のおばちゃんに手渡した。

「あんり？アンタもしかしてそこの券売機で買ったんけ？」

「いいえ、キムチが大好きなんです」

嘘をつきました。団星をつかれ恥ずかしいのでしようもない嘘をつきました。
「そうかいじやあ少しもおまけしておいてあげるよ」

やつちまつた…。おばちゃんの笑顔が心に染みる。待つてくれおばちゃん実は僕はあまり辛い物が好きじやないんだ！むしろ苦手なんだ!!

僕の願いは届かず山盛りのキムチ丼と共に小鉢までキムチにしてくれた。涙が出そうだった。僕は自分の愚かさをあらためて思い知った気がした。

「ま、いっかな。それよか早く席に着くかなっと」

僕はあたりを見渡し3つぐらい空席がある場所を見つけそこに座ることにした。
「さとと、ではいただきます」

僕は目の前の強敵（キムチ丼）と格闘していると隣に誰かが座る気配がした。そう、ようやく彼女、不知火紅華。主役様のご登場だった。

私はいつも通りこここの食堂の朝定食（焼鮭、サラダ、ごはん、味噌汁、漬物）を注文し、席を探していると知り合いの馬鹿が朝から奇天烈なものを食しているのを見て思わず隣に座り質問をした。

「貴様。いつからキムチ大好きキムチ君になつたんだ？」
「勝手に変な名前を創作するな。これはアレだ、『キムチ健康法』ってやつを実践中なんだ」

「ほおー、そうかそいつは感心だ」

私が眞面目に答えると此奴は怪訝そうな顔をし、なにやらブツブツ言つてから「ツツコめよ」などと訳の分からぬことを言つた。

「全く相変わらずのボケ殺しだな紅華……」

「ん？ 貴様今何かボケたのか？」

「……いや何でもないですタイ」

私は少し考えてからこう言つた。「博多弁かい！」そうしたら奴は鳩が豆鉄砲くらつたような顔をして口をバクバクさせたあと「……もういいです」といつてキムチ丼を一口食べた。



こいつは不知火紅華。俺と同い年の17歳。赤髪で腰まである長髪に、気の強そうな吊り眼。一般的に見てかなりの美少女ではあるが、まあ今のやり取りを聞いていただいてわかるようにコイツは超ボケ殺し人だ。わざとなのかそれとも本気なのか全く読めん。

だが、こいつは成績優秀、スポーツ万能の超人だ。おまけに生徒会長まで務める強者だ。もちろん俺と違い僚は個室のスペシャル待遇ときている。全く人がこんなキムチ丼なんか食つてゐるっていうのに……

「自分のミスを棚に上げるな馬鹿者ガ」

「……人の心を読むな。つていうか俺がキムチ丼食つてる理由知つてんじやねえか」

「フフ…軽いジョークだ」

「こいつ嫌いだ。」

「まあそんなことはさて置き、本題に入ろうか」

「ああ…。やつぱし用事があつて来たのね」

「無論だ」

「本当に性格してるぜ。」

「それで今回は一体どんなめんどくさい事件なんですか不知火生徒会長？」

「では朝の会議と行くか天城副会長殿」



「全く食堂で会議とは随分とだな」

「一石二鳥だろ」

「はいはい合理的ですね。んで、今回はどうなの？」

「うむ。実は最近施設内で妖精と生徒が行方不明になつてゐるらしいのだ」

「ああ、やっぱしそれかと僕は思つた。そりや校内でもそれなりに噂になつてゐるからむしろ知らないほうがおかしい。」

「そんで今回の依頼主は誰？」

「うむ。今回の依頼主は高等部三年生の氷河禪^{ひょうがみそぎ}先輩だ」

「へえ、てつきり教職員からかと思つたら一般生徒からの依頼なんだ。それは驚きだ」

ちなみに何故俺が驚いているのかと言うと、この件は既に先月ぐらいから噂になつてたから今更一般生徒から依頼が来るのは思えなかつたからだ。だからてつきり教職員か、研究員が重い腰をあげたのかと推測していた。

「ああ、ともかく我々とは言え、依頼がなければ動けないからな。ようやく来たかと待ち焦がれていたぐらいだ」

紅華は妙にワクワクしているようだつたが俺は重労働および肉体労働はできるだけ避けたい所存だ。とはいっても生徒会としてちゃんと働かないと来月の通貨支給に響くのでやらざるをえないのだが…。

「まあ仕方ない。んで、なにから始める?」

「とりあえず片っ端から怪しいやつを洗うことから始めよう。お前がな」

「へつ? もしかして僕一人でやるの?」

「当然だろう?」

コイツはさも当然のように言つてきやがつた。

何故? どうして? ホワイ? 確かに僕は紅華の部下的な立ち位置だが、何故そんな重労働を僕一人でやらなければならないんだ?『新人アナ初のリポート、ただし台風中継』みたいな

!?!?

「…そのネタは色々なところからクレームが来るから控えろ」

「あつ!ごめんついついつい混乱を…つてだから人の心を読むなよ!」

「大体この采配になんの文句があるというのだ?」

いや、文句しか浮かんでこないんですけど…

「私が肉体労働で、貴様が頭脳労働。とてもわかりやすく適切な判断だろ?」

「…わかったよ。そうですとも、そうですとも。一言一句間違つておりませんよ。会長殿」

僕は渋々了承することにした。

「うむ。ではよろしく頼むぞ。我が下僕よ」

友達を下僕扱いかよ。ちくしょう誰かコイツを一回黙らしてくれ。

「という訳で私は朝食が済んだので先に行くとするぞ。お前も早く済まさないと授業に遅れるぞ。」

「ほえっ?」

僕は思わず素つ頓狂な声を上げてしまつた。よく見ると紅華は朝食を綺麗に(鮭の骨まで)食べ終わつており、僕はというと会話に夢中でキムチ丼(キムチ小鉢付き)をまだ半分も食べ終わつてない状況だった。

「HRまで後十分だ。生徒会副会長として遅刻は許さんぞ」

そんなこと言つて紅華はさつさと行つてしまつた。時刻は八時十八分。よくみると周りに

ほとんど人はおらず：っていうか僕たち以外になかつたりする。

「…早起きなんか一度としない」

僕はそんなことを胸に刻みながら急いでキムチ丼を平らげるのだった。

◇
生徒会。正式名称『生徒会執行部』は一般学校みたいに演説をしたり、慈善活動をするものではなく、主に依頼に応じた校内の異常、もしくは事件などの究明および解決を受け持ついわば『警察機関』的なものだ。細かいこと（例えば物が盗まれた等）は風紀委員が適切なのだが、事件の幅が大きくなるとこうやって生徒会執行部が動くのだ。本来なら教職員、はたまた研究員からの依頼が普通なのだが、今回は何故か生徒のほうから依頼が来た。それほど今回の事件は大きなものなのだ。

元々妖精自体は電子生命体で意思を持つて動くやつも少くないので勝手にいなくなることもたまにだがあるのだが、それが数十件ぐらいに達せばそれは十分大事件だ。しかもここの一月でだ。今僕も調べるものついでに得た情報だがこんなことは前代未聞のようだ。まあこんな怪しい施設だから何が起きても不思議ではないが藪をつついて蛇が出るじゃないが、あまり大きすぎる事件には関わりたくないものだ。

「とは言つても会長があの紅華じや無理かもな」

不知火紅華……。彼女は頭がかなりよく切れ者だ。が、どつちかつていうと頭脳作業は嫌

いで力づくに事を進める暴力主義者だ。そんでついたあだ名が『傷ついた紅い女王』^{スカラーレッドクイーン}ってぐらいだからな……。

生徒会は敷地内で特別に生殺与奪の権限（ただし依頼があつた時だけという制限付き）が与えられている。そんな権限が与えられているぐらいかなり危険な役職だ。一步判断を間違えば自分達だって死にかねない。ちなみに紅華は基本容赦しない。ちなみに『紅い』のところは髪の色だけじゃなく『鮮血』って事からもその由来が来ている。

「まあ他にも理由があるんだけどね」

僕は呟いた。

こんなイカレた時代、イカレた施設だからこそ通る理論だ。こんな時代じやなきやアイツだってただの美少女だったかもしれないのに……。

「まあ、あの性格悪さじや『女王』の部分はとれないかもな」

僕は思わず苦笑した。こんな独り言紅華にでも聞かれたらただじや……
「悪かったな性格が悪くて」

ガタツ！

僕は思わず椅子から落ちそうになつた。後ろには腕を組み両目を閉じて仁王立ちになつている紅華が悠然と立つていた。

「えっと、紅華さんいつからそちらに？」

「うむ。生徒会。正式名称『生徒会執行部』～ぐらいの下りからだ」

最初つからかよ！言えよ！そして気付けよ僕!!

「あのー…、その怒つてらっしゃるかしら？」

「ん？何故だ？私が怒るはずないではないか」

僕はそれを聞いて安心した。よかつた、殴られると思った。

「それより天城ちょっととこつちに来い。プレゼントだ」

何だろう？と僕は思いちらつとワクワクしながら紅華に近寄った。

殴られた。

「さて、では早速依頼主に挨拶に行くぞ」

「あー、了解です」

僕は頭を擦りながら紅華について行つた。：怒つてないって言つたくせに。

「どうもお初目にかかりますお二人とも。僕は三年A組の氷河禪です★」「…………」「…………」

初対面の人間が語尾に「★」を付けた場合僕達はいつたいどんな対応をしたほうがいいのだろうか？

彼は氷河禪。性別♂。真っ黒な黒髪に、真っ黒な瞳でしかも何故か黒い学ランなんか着て

て全体的にとつてもダークネスな外見だが、表情はにこやかでとてもいい人そ�だつた。でも「★」はないと思う。

「つていうかA組ですか？」

「そう。A組だよ」

この学校ではA～Fまでクラスがあり、ここでも格差がありAが最高ランクとなつていて。ちなみに僕はCクラス。中の中だ。

「へえー、A組の人にも被害があつたなんて意外ですね」「ふむ。私のクラスにも数名いたようだ」

A組までも被害に合うなんてこれはやはり一筋縄ではいかないようだ。

「そなんだよ。僕の大変な相棒まで被害に合つて本当最悪だよ」とか言いながら氷河先輩は笑顔を崩さずに話している。うーん、掴みどころがなさそうな人だ。

「それで氷河先輩。どうして自分の妖精がいなくなつたか心当たりはありますか？」

一応紅華にも礼儀というものがあるらしく敬語を使用している。

「そなだよ。それなんだよ。実は僕見たんだよ」

「何をですか？」

「犯人をだよ」



「…………はっ？」

「おいおい、いきなり事件解決か？まだ物語は始まつたばかりだよ。

「では状況をお聞かせください氷河先輩」

「うん。いいよ。一昨日の夜僕が門限を無視して相棒と一緒に夜の散歩をしてたんだ」

「そうしたら突然何者かに襲われてそいつが僕を拘束している間に自分の妖精かな？に命令

して僕の大好きな相棒を一口で食べちやつたんだ」

「…………」「…………」

「なんだろう？簡潔すぎてわからない。っていうかこの人やつぱり脳に異常でもあるのかな？」

「……妖精が妖精を喰らう？そんな話は聞いた事もありませんな」

「紅華の言うとおり妖精が妖精を喰らうなんて話は聞いた事も無い。そもそも電子生命同士
なんだから結合してもまあおかしくはないが今のところそんな話は知らない。

「でも事実だしな……」

「では犯人の顔とか妖精の特徴とか何かわかりませんか？」

「そうだね……。犯人については全くわからないけど妖精の方は多分悪魔タイプだったと思うよ」

「ほお。悪魔タイプとはまた珍しいですね」

一応妖精って名前だが色んな形があり、中でも悪魔タイプと天使タイプは超レアもので、ランクA以下はないとのもっぱらの噂だ。

「うん。それだけは間違いないよ。あんな珍しいタイプは他には思い当たらないしね」

「そうですか。わかりました。とりあえず究明にむけて我々も動きます」

「じゃあよろしくね。紅華ちゃんに深夜ちやん★」

…またそれかい。にしても自分の相棒がいなくなつたのに何でこの人はこんなに爽やかにこやかにしていられるんだ?

「天城何をしている。早く調べに行くぞ」

「あいよー。りょーかいしやした」

まあ考えてもしようがないか。と僕たちは教室を後にした。



「ではまず情報収集から初めるぞ」

「前から言おうと思ったんだけどさ、ここネットとか禁止なんだよ? あんまりやりすぎるとそのうちばれるとと思うんだけど?」

「うむ。大丈夫だ。その時はその時だ」

立派なお考えで…。

「まあいいや。ウルス出てこーい」

僕がそう言うと携帯からロボット型の妖精が現れた。これが僕の相棒ウルスだ。この施設は外に繋がる電子機器は基本的に禁止されているのだが、こいつは携帯からでも色々なネットの世界に入り情報や隠ぺい等をしてくれるサポート専門の妖精だ。

「相変わらずお前の妖精はゴツゴツメカメカしい形だな」

「僕の大事な相棒に文句言うな。第一大きな声で言うなよ。こいつの細かい能力は内緒にしてんだからさ」

そう。こんな能力を大っぴらにしたら確実に取り上げられるからね。実はこいつの能力は厳密に言えば電気信号への干渉である。普段はこれで相手の脳波に干渉したりするだけと言っているのだが(つてかこっちの方がメイン)紅華がこんな使い方もありじやないかと言つたのがきっかけで発覚した使い方だ。だからこの使い方は俺と紅華しか知らない。そもそも基本電子機器禁止なこの環境でこんなこと思いつくかね?生徒会長のくせに平気で校則破るなんて信じられない。

「うむ。破っているのはお前だから私に責任はない」

どうどうと僕を裏切りやがった。しかもまた人の心を読みやがつて。っていうか今の確實に問題発言だ。

「まあいいけどさ。んじゃ初めますか」

そういうつて僕はウルスを自分の携帯にインストールした。ウルスは学校のメインコンピュー

ターに形跡が残らないようアクセスしていく。

「んじゃまずはここ最近妖精が行方不明になつたって生徒をリストアップしますかね」
僕はウルスに被害者の名簿を探らせた。

「ふむふむ…。おや?」

「ん?どうした」

「…いんや何でもない。なるほどなるほど。どうやらここ一ヶ月での被害は約三十四人か」

「ほう。それはかなりの数がいるな」

「ふーん。妖精が妖精を喰ったか?」

僕は先程会つた氷河先輩の言葉を思い出す。

「あの人の言うことはどうも嘘くさいというか、信憑性にかけるというかなー」
まあそもそも前例がないのだから信憑性もくそもないかな。

とか言いながら他にもここ1か月の外出記録やら生徒及び研究員等の行動記録などプライベートもへつたくれもあつたもんじやない事を調べまくつた。

……1時間後……

「ほい、これリスト」

「早いな。さすが唯一の取り柄だ」

「…何気にひどいこと言つてないか」

「褒め言葉のつもりだが」

たぶん本当に褒め言葉のつもりだから困る。嫌味だとしててもむかつくな。

「とりあえずこの4人が今んところ怪しいかな?」

「ほうほう。ん?此奴は?」

「ああ、それなんだけど僕そいつのこともうちょっと調べるから紅華その3人とこ行くなら

一人で頼むよ」

「わかった。では引き続き頼むぞ」

「おう」



とりあえず私はあいつが怪しいと言つたこやつらに会つて話を聞くことにした。

「にしても顔写真付きだから恐れ入る。あの短時間でここまで凝るとはな」

私は珍しく奴に関心を抱いた。

「さて一人目はと…」

3年C組
殺死_(ころ)泰_(たい)二_(ぢ)男。趣味・殺戮

「…いきなり濃いのがキター」

なんだこれ?本名か?そもそも趣味・殺戮つてもう確定か?いやいや安易すぎるとりあえず話を聞いてからでも遅くはあるまい。

そう思いながら私は3年の教室に行きそやつに会いに向かった。

「あ…あの……ば、僕に何かごようですか？」

「…………」

私は教室に着くなり泰三先輩を呼びつけどんな人物なのかと期待しながら待っていると、なんとも中肉中背で、気の弱そうないかにもいじめられっこ風の奴が出てきた。

「…あの、貴方が殺死泰三先輩ですか？」

「は…はい、そうですが…」

「趣味が殺戮だそうで？」

聞いた瞬間何故貴女がそれを見たいな驚いた表情をしていた。しかもかなりオドオドしている。

「な…何故あなたがそれ!?ち…違うんです！あ…あの、あの僕ちょっといじめられっ子体质っていうかなんていうか、その、その…」

あまりにきょどり過ぎていてもはや会話不能に近かつたが、まあようするに…

「つまりあのプロフィールは真つ赤な嘘だと」

泰三先輩はしゅんと頃垂れた後「…そうです」と小さく呟いた。

「ちなみに一昨日の夜は何を?」

「部屋で寝ていましたけど?」

あいつわかつて資料渡したな。帰つたら殴る。

「では紛らわしいのでプロフィールの改善をして頂きます」

「はい、すいませんでした…。趣味の欄は今すぐ訂正に行きます」

「ん?待て。もしかしてアレは本名ですか?」

「本名ですよ」

「名前は本当らしかった…。

「全くあやつは…」

私は文句を言いつつ次の資料に目を通した。

1年B組 あまいぎやゆか
餘木夜由香 女。趣味・綾取り。

「うむ。今度は眞面そうだ」

私は思わず安心してしまった。といつても1年で容疑にあたるとは一体どんな人間か少し楽しみだった。

「うむ。ここだな」

私は生徒に頼みその夜由香という子を呼んできてもらうことにして

…とてちて、とてちて

「なんですかーかいちょーさん?」

天城、私にどうしろというんだ。

教室から出てきたのはどうみても小学四年生としか思えないほど小さい可愛い女の子だった。正直私と一つしか変わらないとは到底思えなかつた。

「？」

夜由香ちゃんは物凄く不思議そうな顔で私を見ていた。私は思わず言葉を失つてしまつた。いかんいかん。来た以上調査はしなければ。

「う…うむ。ちょっと聞きたいことがあつてな」

「なんですかー？」

純粹無垢な顔をこちらに向けて夜由香ちゃんはこちらの表情を窺つた。

「少し妖精を見せてはくれないか？」

「…いいですよー」

そう言うと夜由香ちゃんは携帯を取り出し妖精を呼び出した。

「アラニード出てきてー」

携帯から出でてきたのは毛深くて毒々しい・蜘蛛（多分タランチュラ）だった。美少女に蜘蛛：新手の萌ボイントなのか？

「かわいいでしょー。私の妖精」

たぶん一般的に見てタランチュラは可愛いとは言わないと思うのだが。

「そ…そ…うだな。うむ。可愛いな」

とりあえず話を合わせてみた。どうやらタイプは虫なようだ。悪魔タイプではない。

「この子ねー。糸とか吐けてとっても丈夫なの!! それでね、その糸で綾取りとかできるんだよー」

なるほど、だから趣味・綾取りか。

「そ…か。それじゃ後少し携帯を見せてくれないか」

「うん！ はいどうぞ」

満面の笑みで夜由香ちゃんは私に携帯を渡した。まあさつきのは例外だが一応調査だから調べておくか。

「どうしたんですか？」

「ん？」

「…いや何でもない。それよりここにあるゲーム機は一度没収だ。」

「…ん！ はいどうぞ」

そういうえばすっかり忘れてたといった顔をして頃垂れてしまつた。ちょっと可愛いな。

「では失礼した」

「…はい、です」

最後まで頃垂れていた夜由香ちゃんだった。

「…ろくなのがいないな」

あいつの資料大丈夫か？そろそろ不安になってきた。今まで容疑者候補。いじめられっ子と幼女。

：殴るから斃るに刑罰変更。

これじゃあ3人目も不安でしようがない。私は少し肩を落としてげんなりしながら3人目の人物の資料に目を通していく。

2年A組 終刃鍊馳おわりかまいたち 男。趣味・勉強

「ほお。これはまた真面目な奴が出てきたな」

言わなくてもわかるとも思うがこいつは私と同じクラスの奴だ。成績は私には劣るがいつもトップ5には入るかなり優等生だ。同じクラスといつてもあまり話したことではなく、いつも本ばかり読んでる変な奴だ。

「さてさて、こいつはどうかな？」

私は教室の前でそんなことを考えながら扉を開けた。中には何人かの生徒が残っておりその中に終刃もいた。どうやら本を読んでいるようだった。私は彼の机に歩み寄り彼の前で立ち止まつた。すると終刃は読んでいた本を閉じ顔を上げて私を見た。

「…何か用ですか不知火さん？」

「失礼する終刃鍊馳同級生殿」

「堅苦しい呼び方だな」

「そうか？堅物そうな貴様にはびつたりではないか」

終刃は一瞬怪訝そうな顔をしてから「用がないなら帰ってくれ」と言った。もう何故か不快にさせてしまったようだ。

「いやいや、そうつれないことを言うな。もちろん用があつて来たのだ」

「では早くしてくれ。僕は忙しいんだ」

本を片手に終刃は言った。

「そう急くな。ではまず妖精をみせてはくれないか？」

「何故です？」

「調査のためだ」

終刃は少し躊躇つたが私が引かない性格だということはわかつていたらしく渋々要求に応じた。

「…まあ多分例の噂の調査と言ったところでしようか。いいでしよう。出てこいウルフ」

終刃がそう言うと携帯から狼型の妖精が出てきた。

「ほう、それが貴様の妖精か」

「ええ、というより同じクラスなんだから知っていて欲しいものですよ」

「ちなみに能力は追跡・追尾ってところですか？僕は戦闘向きじゃないんで例の噂とは噺み

合わないと思うんですけど?」

「さてどう判断するのは私達だ。貴様はただ調査に協力していればよい」

「わかりましたよ。存分に調べて早く帰ってください」

そう言うと終刃は携帯を取り出し私に渡した。私をそれを受け取り中の履歴を調べた。

「ほう、変わった本を読んでおるな」

「プライベートですよ」

「そう言うな。私は好きだぞ。この書物は」

終刃はそうですかと付け加え手に持っている本を読みだした。

「うむ。悪かった。返すぞ」

「どうも。で、僕は怪しいですか?」

「さあな?これから帰つてから洗いなおす」

「では、もうよろしいですか?」

「最後に一つ」

「なんですか?」

「昨日外出はしたか?」

「…まあ調べはついているでしようから正直言いましょう。出ましたよ。それがなにか?」

終刃は眉一つ動かさずに答えた。

「いや、今度反省文だ」

「わかりました。それはまた後日で」

「うむ。では失礼した」

私が振り返り立ち去ろうとした瞬間終刃が声をかけてきた。

「なんだ?反省文は不満か?」

「いえ、ちょっと質問です。貴女は妖精についてどう思いますか?」

随分と唐突な質問だった。私は少し驚いてしまった。

「貴女も知っているでしようが妖精とは新人類との交戦時代にイギリスのジーン・マーシャルが開発したもののです」

それぐらいはここにいる人間なら全員が知っている。むしろ教科書の冒頭部分にだつて載っているぐらいだ。知らない方がおかしい。

「彼は生涯の多くを狂人として監禁され自らを『三万一千七十六個の並行世界に同時に存在している』と称し、実際にすべての世界に関する様々な記述を残している。そして妖精とは彼の言う並行世界のどこか一つの法則や可能性を一時的に現実化したものと考えられていますね。彼の死後、妖精は南極地下のマザーシステムによって自動生産されネットなどに流布されていると言われています。」

「やけに詳しいな」

「常識です。そして妖精は現実には存在しないものとされています。それを電子機器や物、情報と言ったものを媒介としてこの世に存在しています。故に様々な能力、固体、力、種類、性格、そして知性を持っています」

終刃は冷淡な口調で続けていく

「そう、彼らは意思があるのです。まさしく完璧な電子生命体としてこの世にいます。貴女はそれをどう思いますか？彼は一体何のために妖精を生み出し、作ったのでしょうか？兵器として？道具として？貴女はどう思いますか？」

彼は表情を変えずに私に問いかけてくる。成程なかなか面白いやつだ

「質問が多すぎるぞ終刃。全くレディーに対する質問とは思えんな。だが答えてやろう。答えは、『わからん』だ」

終刃はさらに醒めた表情になつた。

「私は先の先人が何を考えていたのかはわからん。わかりたくもない。人の思想など思惑など知らぬに越したことはない。多分後悔するからな…」

「随分と冷たいお考えですね。まあちょっと聞いてみたかっただけですからお気になさらずに」

そう言うと終刃はまた手に持っていた本を広げそれに集中した。もう私には興味がないようだつた。

「では、今度こそ失礼する」

私が瞳を返して教室からでた。彼は一瞥もせずに本を読み続けていた。



「ああー…仕事つてだりー」

僕こと天城深夜はようやく調べものも終了して今ようやく解放されたところだ。

全くあの生徒会長様はこれがばれたら大ごとだつつうの。その辺理解してんのかな？

「うむ。仕事熱心で何よりだな天城」

後ろを振り向くと紅華が腕を組みながら仁王立ちしていた。ていうか、だから居るなら言えつての。

「おかげり。どうだった調査の方は？」

「うむ。まずまずだ。とりあえず今夜あたり張り込むぞ」

「えつ？ 今夜？」

「そう、今夜だ」

おいおい、僕をこれ以上勤労させるとコイツ俺を過労死させる気だな。しかも夜つてことは明日の授業はクソ怠いことこの上ないぞ。

「おい紅華！ お前僕をなんだと思ってるんだ!! 僕はお前の奴隸じやないぞ」とは口が裂けても言えないのです…：

「…はい、わかりました」

「うむ。では2時に校舎付近にて待つておるぞ」

僕つてヘタレかな?

そう言つて紅華は踵を返して部屋から出ていこうとすると何かを思い出したように立ち止まつた。

「そうだ天城。今日はよく頑張つてくれたな。プレゼントだちよつと来い」

僕は何だろうと思ひ少しワクワクしながら向かつた

…まず足で首を絞めそのまま3回転。そのまま体を逆さにして僕の左足を取り、僕の体を半回転させ頭から落とすこの技（エアスピンドライバー）をまともにくらつた。

「私に雑用をさせるとはい度胸だな」

「…だからってエアマスターの必殺技を実践で使わなくともよくないか？」

この技は絞め、投げ、関節技を同時にかけるので首も関節も、ってか体全部痛いです。これつてもはや僕既に戦闘不能じやね？

「では今夜待つておるからな」

そう言つて今度こそ紅華は部屋を出て行つた。

「…あのー、せめてこの体勢をどうにかしてつて下さい」

僕は筋肉ドライバーを受けたような形で小一時間過ごすのであつた。



そして深夜2時。俺と紅華は校舎の裏に二人である人物が来るのを待つていた。

「あのー、そろそろ眠いんですけど」

「そうか。それは良いことだ。お前は正常な人間だ」

いや、そんなことで異常か正常か判断されても困るんだけど…。それにしても今夜果たして現れるのかな？

「まあ紅華。もし今夜現れなかつたらどうすんだ」

「明日も張り込む」

勧弁してください。

「まあ概ね問題ない。多分奴は安心しきつてるはずだからな。今夜あたり出てくるだろう全く何を根拠にいつてるんだかね。

「そういうえばお前眠くないのか？」

「私は寝るのが嫌いなんだ」

「何だそれ？何で嫌いなんだ？」

「それは秘密だ☆」

「…………」

この後殴られた。僕が何かしたか？!

「つていかさ、俺別に戦闘しないんだから紅華一人でもいいじゃん」「むつ！貴様か弱い女の子を夜中こんなところ一人にさせる気か？」

「か弱いねー…」

生まれ変わって出直せ。まさか弱い奴は他人にエアスピンドライバーなんてかけねえよ。

「むつ！静かにしろ。どうやら私の勘は正しかったようだ」

「勘で動いてたのかよ」

校舎を見ると小さい人影がちよこちよこと歩いているのが見えた。

でも本当に来たな。予想通り単純らしいな。ではそろそろ行きますかね。

「待つておったぞ。餘木夜由香一年生」

彼女は一瞬ピクッと体を震わせ少し静止してからこちらに振り返った。

「あつ…アレ？どうしたんですか会長さん。外出時間はすぎてますよー」

「私たちは仕事だ。それよりお前は何故ここにいる？」

「えつと…。ちょっとお散歩です」

「ほう。先程貴様も言つたであろう。外出時間は過ぎてゐるぞ。まあそんな些細な校則はどうでもよい。実は昼間に貴様の携帯をチェックしたところ妙な履歴があつてな」

「…………」

「貴様携帯に妖精を何匹持っている？二体や三体ならまだしも二桁は多すぎるのではないか

か？」

「…おかしいですね。履歴はちゃんと隠していてはずなんですかね？」

確かに携帯は巧妙に隠されていたが、僕にかかるれば造作もないことだ。でもウルスの能力はあくまで電気信号への関与なので電源がついていないと侵入できない。だから紅華が直接行つて携帯の電源をつけてくれないと駄目なのだ。まあここは連係プレイつてとこだな。

「…まあばれては仕方ありませんね」

そう言つて夜由香ちゃんは一瞬で僕達と距離を取つた。ざつと五メートルつてとこか？かなり身体能力は高いようだ。

「じゃあ生きて返すわけにはいきませんね！」

彼女は腕を横一線に難ぎ払つた。すると僕と紅華の足がナイフで切られたように切れ目が入り血が噴き出した。

「ぐつ！」

「…………」

なんだ？彼女は何をしたんだ？あそこから一步も動かず僕はまだしも、紅華に傷を負わせただつて！？

「実は夜由香、超能力者さんだったりするんですよー。まあ嘘ですけどね。キヤハハ」
彼女はとても嬉しそうに笑つた。まるで子供が玩具で遊んでいるような残酷で純粹な笑い

方だった。

「ほらほらー、ボーッとしてるとバラバラにしちゃいますよっと！」
「くっ…」

紅華は咄嗟に僕を突き飛ばし庇つた。すると紅華の全身が一瞬で切り刻まれ血が噴き出した。

「紅華!?」

「…黙つてみておれ馬鹿者ガ。貴様は頭脳労働、私は肉体労働だといつも言つてるだろうが…」
確かに僕に戦闘能力はほとんどないけど…でも…

「貴様私が負けるとでも思つてゐるのか？」

「…そうだな。わかつた見てるよ」

紅華があまりに自信満々に言うので取り乱した自分が馬鹿みたいだつた。そうだな。コイツが負けるなんてありえないか。

「なにいちやついてんですか？そんなに死にたいなら貴女から殺してあげますよ。スカーレットさん!!」

そう言うと夜由香ちゃんは両手を振るつた。すると彼女の周りの木や、建物が次々と切られた。だが、紅華はもうそこにはいなかつた。僕という枷がなくなつた紅華は既に夜由香ちゃんのすぐ横にいた。

「なつ?! いつの間に!!」

「では少し大人しくしてもらうぞ夜由香」

紅華が拳を握りしめ殴りかかる。

「まあ想定内ですけどね」

夜由香ちゃんは一步も動かなかつた。一步どころか微動だにしなかつた。なのに紅華はまるで見えないナイフで切られたようにさらに体中を切り刻まれたようになりそのまま彼女の目の前で膝をついた。

「どうですか？夜由香は強いのですよ」

そして彼女はまた腕を軽く振るいとどめをさそうとした。が、それより一瞬早く紅華は距離を取り彼女が攻撃したであろう場所から離れていた。

「はあはあ…」

「全く期待外れの的外れですね。何がスカーレッドクイーンですか？笑わせますねーキヤハハ。もう全身ズタズタのボロボロじやないですか。」

「…いい氣になるな。貴様の手品のタネはもうわかれているぞ」

「…ほお。じやあなんですか？」

「これだろ？」

紅華は手を差し出した。だが、そこには何もなかつた。否、何もないよう視えた。

「へえー。よくわかりましたね。貴女が初めてですよこの蜘蛛糸スレッドを見破ったのは……」

「それは貴様の慢心だ夜由香。昼間私に妖精を見せたのは失敗だったな」

「……ああ、それですか。確かに言わればそうですが、あの時別のを出してもしそれが偽物だってばれたら困りますからね。まあ今となつてはそれがマイナスだったってことですね」

「ふん。綾取りとはよく言つたものだ。そんな可愛いものではないだろうに」

「そうですね。スレッドこの糸自体はただの透明な糸です。それをアラニードを媒介にしてできたのがこの蜘蛛糸です。これ本当に便利で、音もないし見え難い、おまけに総重量五百キロまで

耐えられる優れモノなんですよ」

「なるほどな。派手に腕を振るつっていたのは貴様の周りに糸を張り巡らせあたかも蜘蛛の巣のようにしていたわけか」

なるほどだから夜由香ちゃんは微動だになくとも殴りかかる紅華を撃退できたってわけか。まさに蜘蛛の巣にかかつた虫のように翼に掛かつたってことか。

「ご名答です。さすが生徒会長ご優秀で、キヤハハツ！でもだからなんですか？もう夜由香には誰も触れられない…。遊戯王風に言うならミラーフォース発動状態ですよ？」

「ふん。ならば異外しでも使えるよいことだ」

そう言うと紅華は携帯を取り出し中から刃渡り二十センチぐらいのダガーナイフをとりだした。これが紅華の通常武器だ。



「はん！ナイフで糸を切ろうっていうんですか？甘いですよ。貴女は白い恋人ですか？そんなでこの蜘蛛糸スレッドを破れるとお思いですか。これは普通の曲弦師が使うワイヤーより切れる上に丈夫なんですよー。そんなちょこざいナイフで切れるわけねえだろこの阿婆擦れがあ！！」

「なに、誰も切るなどとは言わんさ。そもそもこんなもの切ろうとするなら斬鉄剣でも使いたいところだが生憎所持していなくてな」

「ほん！じやあそんなもので一体何を…」

「知らないのか？私が何故スカーレットなのか？私のレッドはこういう意味だー出ろコロナ！！」

紅華が叫ぶと同時に携帯から一体の真紅の天使型の妖精が現れた。そうこの妖精こそが紅華の相棒・コロナだ。

「さあ、見せてやるぞ！私とコロナの戦闘をな。コロナをダガーナイフにインストール！」

するとコロナがナイフに吸い込まれるように入っていき、瞬間ナイフが真っ赤に輝いた。

「ほん！それで燃やそうってでんすか。甘いです。ちんすこうより甘いです！この糸は耐熱

にだって余念はないです！」

「貴様こそ甘々だぞ夜由香。コロナとは太陽表面層の自由電子の散乱光のことだ。太陽表面の温度が六千度であるに対し、此奴は百万度以上の高温だ」

「なつ！？百万って…」

「つまりだ、貴様の耐熱どうこうとかそんなものは一切問題ではないということだ」

紅華は一步前に踏み出した。真っ赤に燃えるナイフを手に力強く夜由香ちゃんに向かって行く。

「くつ…来るな!!!!」

ヒュン！彼女は必死に腕を振り回し紅華に攻撃した。だが、もはや紅華は意に介さないようナイス振るい彼女の糸をことごとく焼き払った。

「そつ…そんな…」

「さて覚悟しろ夜由香。これで終わりだ！」

紅華は斜めに思いつきりナイフを振るった。するとナイフから炎が上がり彼女めがけて一直線に向かっていった。

「い……いや――――!!!!…なんつって★」

ボツー！放たれた炎は寸分の狂いなく標的に向かって放たれた…はずだった。僕が見ると燃えているのは技を放ったはずの紅華だった。

「ああ、油断しましたね。慢心しましたね。私だってあなたのレッドの意味ぐらい知つてしまよ。だから言つたじやないですかミラーフォース発動つて…。キヤハハハツ！」

見ると彼女はコンパクトサイズの鏡を掲げていた。なんだ？一体今の一瞬で何があった？！

「そこのお供の方不思議そうですねー。タネをお教えいたしましょう。というかあなた私が持っている妖精が一体じゃないって知つてましたよねえ!?」

「そうだけど…。まさか！」

いや、ありえないことじやない。だが、まさかこんな短期間に、たつた一ヶ月ぐらいで他人の妖精を扱いきることができるのか？

「これでも苦労したんですよこの子使うの。まあ一ヶ月じゃ一体、しかも単純な技ですけどこれしか習得できませんでした。まあこの子持つてた奴は超ザコで殺すのもめんどくさかつたんですけどね。キヤハハッ！」

くつ！予想以上の手練れだったようだな。本当にちょっと甘く見すぎたかも。

「ちなみに今のは鏡を媒介にした鏡の反射リフレクトミラーです。この鏡に妖精の魔法力を反射させ相手にそのまま返すとっても便利な技なんですよー！」

ん？魔法力だけだって。今魔法力だけって言つたか？

「質問だけど、魔法力をそのまま反射させるだけなのかな？」

「そうですよ。それが何か？貴方ごときがそれを知つても何の意味もないですよ。この子を使わなくとも蜘蛛糸スレッドで充分ですよ」

「……そうか、魔法力での炎なら安心したよ」

「はあ!?この後に及んで何を言つて…ッ!!」

「何？腕が熱い…。一体何が…」

「ふん。全く小賢しい真似をしてくれるもんだな」「えつ？このナイフは…」

夜由香が見ると腕に紅華が使っていたナイフが刺さっていた。そして燃え盛る業火をまるで意に介さないかのように紅華は悠然と立ち上がつていた。

「なつ…何で？どうして効かないの？何で燃えないの!?だってそれ百万度以上ある熱量なんでしょう？なのに何で!?」

さすがの彼女も演技ではなく動搖を隠しきれないようだった。そりやそうだ。何故紅華が紅蓮の炎で燃えているのにも関わらず悠然と平然と堂々と歩いていられるのかを知つているのは僕と紅華だけだからだ。

「悪いな、これは昔からの特異体質だな。私は魔法力による炎は一切効かないんだ。例えそれが百萬度でも一億度でも同じことだ」

「はつ？何それ…。特異体質？魔法力でもなく体質…。馬鹿げてる：聞いてないよ…。そんなの私聞いてないよ!?この化け物!!!」

紅華は一瞬不快そうな顔をしてそれから悲痛な声で言った。

「ああ、そうだ。私は

—化け物—

だよ」

刹那、紅華は思いつきり前に跳躍し、夜由香ちゃんの正面に詰め寄り思いつきり顔面を殴りつけた。

「ひぎっ！」

そのまま彼女は後方に吹っ飛び校舎に激突し気絶した。

「ふう。全くさ、効いてないならもつと早く動けよ。ちょっと焦つたじやないか」

「うむ。これも作戦だ。後お前の驚いた顔を見たくてな」

ちつ、そんな余裕まであったのかよ…。慌てた自分がちょっと恥ずかしいじやないか。

「まあひとまずこれで…一つ目の仕事が片付いたな」

…ああ、そうだった。まだもう一つあつたんだっけか。すっかり忘れてたよ。全くこれらが本番だっていうのに前座がこれじやメインはどうなることやらな。

「さてと…」

そういうと紅華は夜由香ちゃんの腕に刺さっているナイフ抜いた。抜くと腕から血がドクドクと流れ出ていたので早く済ませて医務室に運ばないとな。

「こここそ隠れてないでそろそろ出てきてください。氷河禪先輩」



すると校舎の陰から一人の人影が出てきた。

そう、今回の依頼主氷河禪、その人だ。

「アレ? ばれてた?」

おどけた表情で彼は言つた。

「ええ。最初っからですよ。貴方の話を聞きに行つた時からずっとですよ」

「ありやりや、そんな時からばれてたんだ。じゃあ何で懃々僕の依頼なんか受けたんだい?」

「貴方に近づくためですよ先輩。そもそも貴方誰なんですか?この施設のどこにも氷河禪…なんて名前の人物いませんよ」

正確にはいるんだけどない。確かに名簿にはいるけどそれはあくまでいるだけだ。実際にはそんな人物存在しない。僕たちは半月前からこの人物に辿り着いていたがまるで幻のようないでいる存在で名前以外全く情報がなかつたぐらいだ。ある日進展がないままどうしようかと悩んでいると紅華に彼からの依頼があつたと聞いて心底驚いたけどね。

「どうか貴方それすらも知つててなお僕たちに依頼してきましたよね?」

「あらら、それもばれてんだ。さすが副会長★」

「何故ですか? 何故貴方は今更僕たちの前に姿を現したんですか?」

「うーんとね、そりゃ当然彼女・不知火紅華に用があるからさ」

「ほお。私が目的。デートのお誘いならお断りだぞ」

「それは残念だね。それも二つだけど…」

「それも理由の一つかよ。本当に読めないし食えない人だ。

「とりあえずお一つ手合せ願いたいんだけどどうかな?」

ゾクッ!

瞬間空気が凍りついた。なんだこの殺氣というか悪意は!?これはあの氷河先輩?さつきまでとは段違いの冷たい迫力だ。彼の真っ黒な瞳、真っ黒な髪、真っ黒な学ランに、そして真っ黒なオーラ…。これがこの事件の黒幕・氷河禪か…。

「そうか…」

すると紅華は有無も言わず超スピードで氷河の前に現れそのまま組み伏せナイフをのど元に突き付けた。

「うつわ…。容赦ねえ」

「ふん。そもそもこっちはお前みたいな謎の人物とまともに戦りあう気はない」

「おいおい、主人公のくせに姑息だね」

「質問に答えろ。貴様はなんだ?何のために妖精を集めさせていた?」

「えっとね…、やだ。教えない」

ズバツ

紅華は容赦なく氷河の頸動脈を断ち切った。…おいおいもうちょっと粘れよ。本当に容赦ないな。これじゃ何も聞き出せ:

「だがその冷淡さ嫌いじやないぜ」

「!!」

紅華が後ろを振り向くとそこには紅華を指さし見事にいい顔した氷河が立っていた。

「…貴様今何をした?私は確かに貴様を組み伏せ頸動脈を断ち切ったはずだが…」

「さあ?見間違이じやない?」

「ふざけるな!!」

紅華はもう一度氷河に切り付け、コロナの力で超高熱となつたナイフは切つた先から燃えだしていた。

「…今度こそ」

「うんうん。頑張つてるね。」

「なつ!」

氷河はまたも紅華の背後に悠然と立つていた。

「なんだ?何をしたんだ!!?

「不思議そうな顔をしてるね。いいよ別に隠すことじゃないし教えてあげるよ。まあ平たく

言えば僕の能力は相手の認識をずらす嘘の虚影つてやつさ」

「認識…をずらす？」

なるほど、だからそこにいたはずなのにいなかつたのか…。でもなぜ態々そんなことばらすんだ？言つてしまえばこの能力は相手の虚をついてこそその真価を發揮しそうな能力なのに何でだ？何よりさつきから紅華に攻撃するチャンスがありながらそれをしないのは何故だ？どうみても遊んでいるようにしか見えない。

「貴様ふざけているのか？そんなんのタネが割れてしまえばどうということなどないぞ」「いいね、その喰呵。じゃあやつてみせてよ」

「ふん。後悔するなよ！」

紅華はナイフを振るいそこから高熱の炎を斬撃状に繰り出し、氷河にヒットした。が、またもそれは氷河をすり抜け奴はそのまま隣にいた。

「あれあれ、どうしたのかな？また外れだよ」

「…せいや笑つていろ。ハツ！」

紅華はナイフを正面に突出しその先端から小さな炎の塊が幾千も生み出されていく。

「いくら認識をずらしたところでこの無数の炎弾は避けられまい。散れ！」

叫んだ瞬間炎の弾は紅華の正面を中心に行方八方に飛び散った。これならいくらなんでも…

「後ろ以外は完璧な攻撃だね」

「！」

紅華は反射的に真後ろを切り付けた。が、またもそれはすり抜けた。

「貴様…、どこまで小瘤な」

「ははっ。僕は嘔吐さだからね。」

それから紅華は何度も何度も氷河に向かって攻撃を繰り返したが、それはすべて空振りで文字通り遊ばれていた。こんな紅華初めて見た…。やばい、こいつ強い…。

「ハアハア…」

「なんだよー。もうばてちやつたの？ちょっとガッカリだよ。赤色がこんな程度だったなんてるさ」

「…そ…か。ならばもう終わりにしようか」

「えつ？」

「貴様の嘘の虚影の効果範囲は約五メートルだろ？」

「…へえ…。成程、無闇に攻撃してたってわけじゃないんだね。でもそれがどうしたの？それがわかったところで…」

「いや、そうでもないさ」

「ザクツ！」

紅華はナイフを思いつき地面に突き刺した。

「囲め……炎 上 壁！」

その瞬間ナイフが真っ赤に光、ナイフを中心にして炎の壁が氷河と紅華を囲んだ。

「なつ……？」

「……どうだこれで逃げ場はないぞ。貴様を中心に直径十メートルを囲ませてもらつた。これで嘘の虚影も無意味だ」

「……こんな技があるなら最初から囲うこともできたはずだよね。なんで使わなかつたの？」

「ほん。私は主人公だぞ。多少ピンチを演出するのは務めだ。さてそろそろ燃えて……！」

紅華はとどめを刺そうと氷河を見ると、氷河は両膝をつきボロボロと泣き崩れていた。

「い……嫌だよ……死にたくないよ……。ねえ……お願いだから殺さないで……僕……死にたくないよ……」

「……因果応報だ。貴様だって夜由香を使って生徒達を殺しただろ。その報いだ」

「だつて……アレは……あの子が勝手に……」

「同じだ。貴様がどうやつて言いくるめたかは知らん。だが貴様が黒幕である以上ボスが責任を取るのは当然だろう。もう貴様の戯言は聞き飽きた。焼き尽くせコロナ」

紅華はナイフをもう一度地面に突き刺した。すると炎の中は炎で満たされた。

「……うわあ。派手に燃やしてんなアイツ。これ大災害だぞ」

外側から見ると真四角にその場所だけがきれいに燃えている奇妙な図になっていた。

「まあアイツ事態に火は効かないから大丈夫だろけどさ。こりや相手も気の毒だな」

しばらくすると炎は消え黒い煙だけが残つた。するとそこから人影らしきものが立つっていた。

そこにはボロボロの紅華とその額を驚愕みにしている氷河禊、そして禍々しい姿をした悪魔型の妖精が立つっていた。



「なつ！ 紅華！！」

「やれやれ、まさか覚醒前でここまでとは計算外だつたよ」

氷河はため息交じりに言つた。

「全く覚醒前にこの眼を使う羽目になるとはね。恐れ入つたよ」

見ると氷河の眼にはまるでブラックライトを当てたかのような漆黒の六芒星のような形が瞳に薄らと浮かんでいた。

「な……なんだそれ？お前一体何をしたんだ!?」

「不思議に思わなかつた？僕が何故自分の能力を明かしたのか、何故媒介も無しに能力が使えたかをさ」

「まず一つ、認識をすらす嘘の虚影：アレ本当は嘘なんだ。僕とルシフェルの能力は食欲^{フエイクシャドー}
なる闇^{スクボル}、エネルギー吸收さ」

「えつ？ エネルギー吸収って…。なんだそれ聞いた事も無い。それに僕とルシフェルってどういう意味だ？」

「それともう一つ、媒介はね、実は僕自身なんだ。その証がこの黒い六芒星の瞳さ」

「なつ何言つてんだ！ 人間を媒介になんて聞いた事…」

「それが僕達新人類だけに許された…いや、その新人類すらも超えた魔眼保持者さ」

「…新人類を超えた魔眼保持者だって？」

「そう、魔眼は碧・赤・闇光の四大属性からなる世界に四人だけの存在…。作られた天才さ」

「いや、化け物か、と氷河は自嘲気味に苦笑した。

「因みに僕は闇属性。僕の力と、ルシフェルの使徒喰い^{デスマイヤー}、合わせて初めて食欲なる闇になるのさ」

「作られた天才…魔眼保持者…。それじゃあまるで紅華と同じじやないか！」

「そう。そうだよ。君の考えている通り彼女も魔眼保持者さ。そのため僕はここに来た。

彼女の…おそらく赤の力を喰いにね」

だが、と。氷河は付け足した。

「それは覚醒してないと意味がないんだ。だから極限まで追い詰めたつもりなんだけどまだ

足りないのかな？」

「…貴様大人しくしていれば好き勝手言いおつて」

「あれ？まだ意識が有ったの？ちよつと驚き。まあ氣絶してたら起こそうと思つてたからちようどいいかな」

「…殺してやる」

「おいおい、怖いなー。同じ新人類魔眼保持者どうし仲良くしようぜ」

「…貴様と仲良くするなら死んだ方がましだ」

「まあどうせ君は喰らうから心配しなくとも君は死ねるよ。でも、一つちよつと質問。君はなんで新人類が生まれたんだと思う？」

「…はっ！ 何だそれは？」

「僕たちは人類によつて作られた。でもそれを滅ぼしたのも人類…。意味が分からない。じや

あ何故僕たちは生まれたんだろうね？ 僕たちに至つてはもはや人でもなけりや新人類でもない：化け物、兵器、道具、殺戮人形。僕は色々と言われてきた。自分はただのモルモット：実験動物でしかない。多分意味なんかないんだよね。この世界には何の意味もないようにな。

無価値で無意味で無関係なこの世界：いつそ壊してしまった方がいいんだよ。それが僕たちが生まれてきた意味。唯一の存在意義なんだと思う。君はどう思う不知火紅華さん？」

「…………」

紅華は沈黙した。否、何か考えて入れるようだつた。少しの静寂の後紅華はこう答えた。

「…はあ、今日はまたこんな質問ばかりだ。奴にもこう答えたが私の答えはやはり『わからない』だ」

一度区切つて紅華は語り始めた。

「確かに私はお前の言うとおり新人類だ。全くよく調べたものだ。このことはそこの馬鹿と一部の研究員しか知らないんだがな。まあ知っている人間がいれば自ずと漏れるものだといふことか。話が少し逸れたな。わからないとはそのままの意味だ。そんなものわかるわけがないだろう？貴様も大概理想主義者だな。どうしたら自分をそんなに過大評価できるんだ？世界を壊す？馬鹿馬鹿しい…そんなことただ一人のたかだか生物がどうこうできる問題ではなかろうに。いいか、存在意義だの理由だの私達なんぞちっぽけな存在が理解することなど、鳥誂がましくはないか？それこそ世界を壊し、破壊し、終わらせるなどを神にも無理だ。できるならもうとつくにこの世は壊れている。確かに世界は狂つているかもしかん、が。だがそれがどうした？私は今幸せだぞ。私は化け物だ、兵器だ、道具だ、殺戮人形だ。でも私には仲間がいる。そんな私を見捨てない馬鹿がいる。私にはそれで十分だ。もし存在意義があるとすれば私は多分それだと思う。それが答えた氷河禊」

彼女は苦しそうに言つた。でも表情はとても誇らしく見えた。多分彼女はこの学園で誰よりも痛みのわかる奴だ。他人が傷つくのも、自分のせいで傷つくのも嫌いだ。だから自分だとすれば私は多分それだと思う。

「…ああ、無い。そもそも私はそういう風に作られたものだと今知つた」
「覚醒には条件があるんだけど、一番簡単なのが精神の崩壊かな？お逃え向きにちょうどいい人物がそこにあるし」
「…待て、何をする気だ!?」
「簡単だよ。君の幸せを破壊しに行くんだよ」
「やめろ！奴は関係ない！」

「おいおい、大事なお友達を関係ないとか言うなよ可哀想だろ。でももう無理だよ。僕を知つてしまつたからには生きて返すわけにはいかないし。せいぜい利用させてもらうよ」

そういうと氷河は紅華を掴んでいた手を放したが、紅華はそのまま空中に静止したままぶら下がつっていた。

「…なんだこれは!?」

「ああ、そうそう。言い忘れたけど僕の力は喰らった精霊の能力を媒介なしに使えるんだ。

「際限なく無限に貪欲にね。混ぜることだってできる」

「故に貪欲なる闇さ。と、氷河は付け加えた。

「さて大人しくしててよ天城君。ちなみに君の能力は調べ済みだけど、それは僕には効かないから安心して」

「……だろうな。あんたみたいな異常変態人物の電気信号なんて触れたくもない」

「じゃあまず足からね」

そう言つて氷河は俺の両足を折つた。

「ダメッ！」

ボキッと鈍い嫌な音が響いた。くそっ！何をされたのかもわからんねえ！

「これで逃げられないね。じゃあ次はとりあえずアバラ骨一本ずつ外してくださいかな」

氷河は天城の胸に手を当てた。すると氷河の手が天城の体内にズズッと音を立てて入つていった。

「なっ!?」

「じやあこのまま一本ずつ直接君のアバラを外していくてあげるからいい声で鳴いてね」

「やめろ氷河!!」

紅華は身動きが取れないまま氷河に向かつて叫んだ。

「じやあ早く覚醒してよ。そうしたらやめてあげる」

「グッ…」

言つてる間に氷河は天城のアバラを一本外した。

「大丈夫だよ。アバラ骨つて左右合計二十四本もあるからまだ後二十一本あるからもつと鳴いてよ」

一本、二本、三本…氷河は一本ずつ丁寧に外していく。それは地獄の拷問にも似た痛みだった。天城は…それでも声を出さなかつた。

「…理解できないね。痛くないの？ひょっとしてマゾ？」

「…そうかもな。さつきから痛すぎて意識飛びそうだよ」

「じやあ早く鳴けよ、泣けよ、哭けよ。お前の役目はそれだけだよ」

「嫌だね」

天城は一言だけそう言つた。

「僕は決めたんだ。アイツが苦しむような真似は絶対にしないって。これ以上アイツを傷つけたくないんだよ」

「綺麗ごとかい？三流の決め台詞だね」

「そんなんじゃないよ。でも僕は…僕だけはアイツを傷つけない。そう決めたんだよ。例え死んでも僕はそれだけを守る。それにアンタの思い通りになるのも癪だしね」

「……そうかい。じゃあ目障りださつさと死んで」



氷河は天城の体から手を抜き、右手で彼の顔面を掴み吊し上げた

「……ッ！」

「このまま頭蓋骨を碎いてやるよ

「やめろ！やめてくれ!!」

紅華が悲痛そうに叫ぶ。

「嫌だね」

どうしてだ…。私はもう…誰も失いたくないのに…。何故邪魔をする…。許せない…許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない許せない

ズバツ

音がした…。何かを切り裂く音がした。

氷河は自分の左腕を見た。なかつた。どうやら切られたようだ。だが、切られた腕はどうにも存在してなかつた。

「…なんだこれ？」

氷河は天城を降ろし紅華の方をみた。

すると紅華は俯きながらこちらを向いていた。

「バカな……吊り釣り手首が消されてる?」

確かに奴は魔眼保持者である。だが、予測では奴の色は赤。僕の貪欲なる闇アグリヤで作ったものかどうかできる力ではないはず。

一体どうなつて…ツ!

氷河は見た。見てしまった。彼女の眼を、自分を低く睨みつける彼女の白色の魔眼を……
「おいおい……。完成してたなんて聞いてないぞ。白は実現不可能じゃなかつたのかよ!?」

見ると彼女の瞳には真っ白に輝く六芒星の紋章が爛々と輝いていた。同時に彼女の精神

それに呼応して紅蓮の体が白色に変化し、頭の上には同色の小さな輪が浮かんでいた……あたかも本物の天使のような姿をしていた。

赤碧闇光四大属性……。更に実現不可能だと言われた色白。

紅華は立ち上がつたかと思うとそのままガクツと両膝

うわああああああああああああああああああ

それに呼応するかのようにコロナは紅華の中に入った。すると紅華の周りに白色の六芒星

氷河は僕から手を放した。

「どうやらアレは今僕の手におえるものじやないね。一端引かせてもらうよ」「三番目。う、待てよ。アーマー可ど、工達は一本どうよつこしど?」

喋つてゐる今も紅華の周りは六芒星が散らばり消滅していく。ま

に、駄々をこねるみたいに無差別に消えていく。

（中略）

と消飛ばしちゃうかもね。まさしく最終の力だ。この世を終わらせる力そのものさ」「…………」

「さすがに僕でもアレは喰えないや。食べちゃつたらそのまま僕ごと消滅しちゃいそうだし。やれやれ全く計算外だらけだよ。アイツ僕まで騙してたのかよ。僕より嘘吐きだな」

「しかもあの子暴走してるし…。」このままじやこの辺一帯全部消飛ぶね。まあそーゆさせたのは僕何だけどさ」「

「止める方法は?」

「さあ？殺せば止まるんじやない」

「テメエ」

「おつと。もう君たちに構つてる場合じやないな。君も早く逃げなよ。今度こそ間違いなく

本当に死んじやうよ。じやうねえ！★

それだけ言うと氷河はさつさと逃げてしまつた。

「…はあー。全くアイツは世話が焼ける…。寂しがり屋の悪魔かっての…。やれやれこつちは重体だつての。でもまあ、ほつとけないしな」

僕は折れた両足でヨロヨロと立ち上がった。

ここはどこだ？私はだれだ？何故生まれた？何故ここにいる？わからないわからないわからないわからない

私の最初の記憶は液体の中だった。そこから始まった。それが最初だった。私は道具だ。兵器だ。化け物だ。初めから、そう生まれた瞬間から。

私には何もなかった。友達も恋人も家族も両親も思い出も、心も、何もなかった。あるのは力だけ。圧倒的なまでの力だけ。人を生物を殺す力だけ……。私はそんな自分が嫌いだった。

それしか存在価値がない自分が……。

私が好きになつたものは全て壊された。最初はネズミだった。何もない真っ白な部屋に一匹だけいた。孤独な私の唯一の友達だった。起きたらバラバラに解体されていた。次は花だった。実験室にあつた綺麗な花だった。起きたら粉々だった。次は研究所の研究員だった。私は話しかけてくれる唯一の人間だった。起きたら串刺しにサレテタ。私は寝るのが嫌いになつ

た。同時に愛することが嫌いになつた。私が愛すると無くなつてしまふからだ。

だつたらいつそ何もない方がよかつた。今回だつてそうだ。私に関わると皆消えるんだ。だつたら全部消えてしまえ。だつたら拒絕しろ。全てを！真っ白な声が聞こえる。堕ちてくる。頭に響いてくる『消えろ消えろ消えろキエロキエロ消えろきえろ消えろキエロ!!』消えてしまえ！そして何もかもを拒絶しろ!!!!

人も動物も、微生物も、海も山も大地も、植物、雲、絆、友情、愛情、愛、世界、宇宙、銀河、地球、天国、地獄……。全部、全部消してやる！私が…全てを！拒絶し…根こそぎ消滅させ
てやる!!!

私は眼を静かに開いた。



「……ははつ。アハハハハハハアハハハハ！――！」

紅華は今度は勢いよく立ち上がり白色の六芒星が光る眼を見開き大声で笑った。その瞬間六芒星の数が爆発的に増えた。もう彼女に近づくことすら不可能になっていた。

「こんな…こんな狂つた世界私が消滅させてやるう!!」

「お前には無理だよ」
「もういい…。十分だ…。このまま全てを終わらせる。そして私自身も…」

声が聞こえた。この消滅と拒絶の中に、その中に声が一つ響いた。

彼は彼女の正面に堂々と立っていた。折れた足の痛みを堪え、外れたアバラの苦しみも無視し、彼はそこに立っていた。

「…何故ここまで来れた? 消飛んでもおかしくないはずだぞ」

「だから言つてんだろ。お前には無理だって。甘々のお前に世界どころか人ひとり殺せるかつてんだ」

声の主は淡々と言つた。何故だ? 死ぬのが…消えるのが怖くないのか?

「理解できぬ。私は化け物だ、兵器だ。そんな私が怖くないのか?」

「ないね。確かにお前は僕を散々こき使つた拳句殴る蹴る絞めるの三段コンボを決めてくる最低な奴だ。だけどな、そんなお前が僕は好きだよ」

「…戯言を…。何も知らないくせに。私がどれだけ傷ついているかも、どれだけこの世界を恨んでいるかも知らないくせに…」

「ああ、知らない。でもさ、もしお前が本気なら僕はとっくに消えてるさ。だけどここに存在している。何故だ? 簡単だ。お前にはそんなことできない。僕を消すことなんてできない。それがお前の甘さだ、優しさだ。散々傷ついて憎んでも、それでも人ひとり殺せないお前が化け物の訳ないだろ?」

「…貴様がどんな風に私を思つているが知らないが、どんなに否定したところで私がしたこ

とは変わらない。今まで私のせいでたくさん的人が犠牲になり、たくさんの命が潰えた…。私はこの世に存在してはならないんだ。だから…」

「世界も消して自分も死ぬってか?…全くさつきからネガティブな発言ばつかしやがつて…。仮にそうだとしてみさ、それでお前が死ぬ理由になるのか? 理屈ばつかこねるな。生きるのに資格も理由もいらない。そんな屁理屈で僕はお前を諦めたりなんかしてやらない」

「…馬鹿だなお前は」

「よく言われるよ」

「何故そこまで私を信じられる? 私は全てを終わらせるためだけに生まれたようなものだ…。そんな私が何故世界を消せないと断言できるんだ?」

「だからさつきから言つてるだろ。甘ちゃんのお前にそんなことできないって。大丈夫だよお前はまだ遅くない、手遅れじやない。僕と違つて手遅れじやないから…。だから自分をそんなんに無碍にするなよ。寂しいじやんかよ。僕はお前とまだ一緒に生徒会やつてみたい…。それが理由じや駄目か?」

「…」

消滅が消えた。彼女の瞳から白色の六芒星が消えた。その瞬間周りの拒絶の紋章も消えた。

「…はあー。お前にはつくづく呆れさせられる」

「どうも。お前にはヒヤヒヤされるよ」

「よく言われる。：すまなかつた」

「いいよ。いつものことさ」

「いや、本当にすまなかつた…。私は怖かったのだ。自分が化け物であることに…。昔私のせいでたくさんの命が尽きた。小さいものから大きなものまで…。私に関わったもの全てが壊れた…。だから私は臆病になつてしまつたんだ。何かを失うことに、何かを壊されることにな…。だからお前が殺されそうになつたとき私は委ねたんだ。全てを力のままに、成すがままに全てを…。だが、そんな拒絶の中お前の声が聞こえたんだ。実はあの時半分正気に戻っていたんだ。それでも私の中の黒い…いや、真っ白な声には逆らえなかつた。：貴様のおかげだ。礼を言う」

「…いいんだよ。お前は僕とは違う。それに最後に決めたのはお前だ。お前がこの世界を本当に恨んでいたなら僕が居たところで何も変わっちゃいないよ。だからこれはお前の意思だ。それは誇つていいんだぞ」

「…うむ。そうか。」

紅華は少し微笑んだ。そういえば此奴が笑つたとこなんて初めて見たな…。

「ところで貴様さつきから『自分は手遅れだ』などと言つてはいるが何故だ？」

「それは秘密だ☆」

「キモイ」

バッサリ切られた。ちょっと傷つく…。

「うむ。まあよい。そうだ。ちょっと来い天城」

「…また殴るの？」

「大丈夫だ。私がそんなことするわけないだろ？」

僕はホソッと胸を撫で下ろした。

ワクワクしながら近寄つた。

キスされた。

「…なつ、何してんだよお前!!!？」

「うむ。では行くぞ。天城副会長」

「つてちよつと待てよ！この穴だらけの地面やら半壊の校舎はどうすんだよ!?」
もちろん紅華が消したものは元に戻つてはいない。地面は抉られ、校舎は半壊、おまけに外壁に至つては跡形もない。

「うむ。私はどうやら消す力はあつても治す力はないようだ」

冷静に言うなコノヤロー！これはいくらなんでもやばいって！つてかこの騒ぎでなんで誰も来ないの？皆お寝坊さんなの？」

「うむ。その突つ込みはいかがなものか甚だ疑問だな」
「うるさい！こんな時に突つ込みもクソも：だから人の心読むなよ!! ああもうめんどくさ

い!!」

「テンションが高くて何よりだ。では帰つて寝るぞ」

「待てよ！本当に？本当に帰つちゃうの？これほつといていいの？ってかお前主人公だろ？主人公が一番被害大きくしていいのかよ！」

「うむ。どうやら私は主人公ではなくラスボス：ゾーマ的な存在だったらしいな」

勇者が一転魔王って、どんなRPGだよ…。

「大丈夫だ。生徒会にその手の行為は免除という規定もある」

「いや限度つてもんがあるだろ！ってか今回依頼失敗だろ！あいつ逃げちやつたし！」

「なんだアイツ逃がしたのか？役立たずめ」

コイツ絶対に感謝しない。僕は切実に思った。

「まあ仕方がない。出直しだ。今度こそ捕まえて私の前に土下座させてやる」

ああ、一応怒つてんのね。そりやそうか。今回こうなつたのも全部アイツのせい…。アレ？

なんだろうそう思つたら腹立つってきた…。つてかあちこち痛ツ…

「だあー！忘れてた!!僕今全身バツキバキだつたんだ!!!あちこち痛い!!!」

「ほお、痛みを忘れるとは貴様とうとう痛覚まで馬鹿になつたか。うむ。さすがだ」

何がさすがなのかわからない。うー：意識したら余計に痛い。さすがに歩くのは無理っぽいな。よくこんな状況で歩けたもんだ。

「…仕方ない。ホレ」

紅華は屈んで手招きした。

「背負つてやる。医務室まで連れ行つてやる」

「…………」

かつこ悪い…。正直かつこ悪い。散々かつこつけといで最終的には女の子に背負われ退場なんて…。

「早くしろ。それとも嫌か？」

「…はい。今行きます」

僕は仕方なく。紅華に背負つてもらい、そのまま医務室に向かつた。

「ぬつ。貴様軽いな。やはりキムチばかり食べているから栄養が足りないのか？」

「…冒頭の下りを引つ張るな。台無しだ…」

◇
「やれやれ、とんだ災難だつたよ。どういうことだい終局？彼女赤じやなかつたじやないか腰に手をあて氷河が怒つたボーゼをした。左腕がないので少し変な感じだつた。

「別に僕は赤なんて一言も言つてないぞ禊。僕はただ彼女が魔眼保持者だと言つただけだ」

「アレ？ そうだけ？でも白色が完成してるなんて聞いてないよ」

「…それに関しては僕も同感だ。全くあの人は何を考えてるんだかな」

「あの爺本当適當だよねー。んで、どうすんの?」

「一先ず様子見だ。アレは危険すぎる。正直手に負えないのが現状だろ。それともその左腕のリベンジにでも行くか?僕は止めないぞ」

「…いや、いいよ。どうせ誰か喰えれば生えてくるし。僕も終戻の意見に賛成だよ。」「フフッ…。まあ楽しみは最後まで取つておくさ…」



「…なあ天城」

「何だ?」

紅華は僕を背負いながらこう言つた。

「…お前だけは消えないでくれ。」

振り絞つたような悲しい咳きだつた。

「当たり前だろ。」

僕は背負われながら迷わずそう答えた。紅華は「そうか…」と微笑みながら小さく呟いた。

{ f i n }

（あとがき）

初同人です。この作品を書くにあたって色々準備しました。
まずパソコンを購入しました（爆）。他にもその他必要なものを買い揃えから執筆にあたりました。

私はこの同人サークルに入るのが一番遅く…というか急遽参戦させていただいたようなものなんですが、最初何を書くのかわからずにつつ返事でOKを出してしまいました。それから話を聞いてみると…

なげと「話のジャンルはファンタジーでお願いします」

作者「…………マジで？」

実は私はファンタジーって書いたことないんです。それ以前にまだ二作品ぐらいしか書いた経験がなく、正直出だしからピンチでした（笑）

だが、それを言い訳にしては駄目だと自分に言い聞かせ必死で書くこと一週間。無事に完成いたしました。一時はどうなることかと思つたけど…。っていうかこれファンタジーか？

この作品を執筆中に丁度西尾維新さんの『戯言シリーズ』を拝見していたのでかなりネタがそれっぽくなってしまいました。ネタに至つてはもはやパクリの域を超えた気がしました。

最後にこの作品の構成を考えて下さった奏さん。イラストを描いてくれたなげと君。その他メンバーのみなさんありがとうございました。それではこの辺で、さようなら！